

令和4年度 江戸川区立葛西小学校 学校関係者評価 最終評価用報告書

学校教育目標	○心ゆたかな子ども ○最後までやり抜く子ども	○よく考える子ども ○健康な子ども	目指す学校像 目指す児童像 目指す教師像	・保護者にとって、子どもを通わせてよかったと思える学校 ・「確かな学力」「豊かな心」「健康な体」をバランスよく備えた子ども ・人権尊重の精神に富む教師。保護者や地域との連携に努め、誰からも慕われる教師
前年度までの学校経営上の成果と課題	<p>&lt;成果&gt;新型コロナウイルス感染症の影響で一昨年実施できなかった運動会や学習発表会などの行事を、感染予防に努めながら実施することができた。外国語科や外国語活動と中学校の英語科の連携授業や算数科の研究における中学校教員からの助言、小中合同の防災訓練の実施など小中連携の推進を図ることができた。</p> <p>&lt;課題&gt;若い教員が増える中で、授業力・指導力の向上、同時に学習用タブレットやiPadを活用した授業の展開を図り、児童にとって分かりやすい授業を実施していくこと。不登校対策支援シートの継続的な作成と、不登校児童を0にすること。</p>			

教育委員会重点課題	取組項目	評価の視点	具体的な取組	数値目標	自己評価		学校関係者評価		来年度に向けた改善策	
					取組	成果	成果と課題	評価		コメント
いきいきと学ぶ学校づくり	確かな学力の向上	・7つの主な事業(取組)に対しての学校の組織的な対応による取組の実施や充実	・全教員の授業公開を年間1回以上行う。 ・第6学年では教科担任制を活用した、教師の授業力向上と授業内容の工夫や改善を行う。 ・児童のiPad活用を促すとともに、「eライブラリアドバンス 江戸川っ子study week」を学期に1回実施。 ・放課後に補習教室を実施する。	・国語や算数における単元末のテストで正答率が8割以上の児童を低学年であれば9割、高学年であれば8割以上を目指す。 ・放課後の補習教室の実施回数を年間35回以上にする。	B	B	○国語において、低学年では約8割、高学年では約7割の児童が8割の点数をとった。 ○教師の授業力が高まることで、児童は学習規律を守り、落ち着いて学習に取り組むことができた。 ○時間があると、児童は授業の中でタブレットを使って復習する姿が多く見られるようになった。 ●教師のさらなる授業力の向上と児童が確実に学習規律を守って学習に取り組めるようにすることが課題である。	B	・タブレットを活用した授業の進め方について、教師の得手不得手による授業力に差が出ないようにしていきたいとの説明に期待したい。 ・各学年ごとにICT活用到達目標が違うとの説明があり、保護者の方々に差支えの無い範囲でお知らせすることでタブレットを使うことの理解が深まると考える。	ICTについての研修を大事に、機器をより活用できる指導力向上を目指す。周囲の考えを聞き、認め、それをまとめて自分の考えを構築する力を育てる。様々な場面で主体的に発信できる力を身に付けさせるために、グループ学習の機会を増やす。
	体力の向上	・「運動意欲の向上」に向けた取組の実施、充実	・「葛小遊びタイム」の計画を立て、運動が苦手な児童の運動への参加を促す。 ・走る、投げるを中心とした運動の充実。 ・冬期、持久走タイムの実施。 ・長縄跳び記録会の実施。	・年間における「葛小遊びタイム」の実施を20回以上と設定する。 ・持久走の記録の伸びを見る。初回の記録から、記録会までのタイムを用紙に残していく。 ・長縄跳び記録会において、26学級が目標に定めた記録を更新する。	A	A	○校庭で元気に体を動かす児童が増えた。休み時間に普段教室で過ごす児童も校庭に出るようになった。 ○持久走記録会や長縄跳び記録会を通して児童は体力を向上させることができた。 ●今年度の体力テストの結果を踏まえ、児童にどのような力を身に付けさせるか具体的に検討していくことが課題である。	A	昼休み多くの児童が校庭で遊び、学校生活が楽しいと感じる生徒が多くて良い。 体力テストの結果から、スコアが平均的になり良いと感じる。引き続き体力向上に取り組むことを期待する。	体育の授業や葛小遊びタイムが学校に定着する一つのきっかけになる楽しい活動になるように教員の意識を高める。体力向上し、さらに不登校生徒の数を減らすことに結び付ける。
	読書科の更なる充実	・読書を通じた探究的な学習の充実	・図書館ボランティアによる読み語りやお話集を充実させ、本好きの児童を増やす。 ・図書館を活用した調べ学習を、高学年は学期に1回以上実施する。 ・低学年は図書館での読書活動を毎週必ず行う。 ・区立図書館職員の巡回を活用し、図書館環境を整える。	・年間の読書した本の冊数が、低学年は80冊、中学年は70冊、高学年は40冊となるようにする。 ・調べる学習への参加が30人以上となるように言葉がけを行う。 ・葛西図書館との連携を図り、本の活用の仕方等を学ぶ活動を、低学年において年間3回以上実施する。	A	B	○年間を通して読書した本の冊数が低学年ではほぼ全員が80冊以上となった。中学年は8割の児童が70冊以上、本を読むことができ、高学年では9割近くの児童が40冊の本を読むことができた。 ●学校図書館にある図鑑や本を活用した調べる学習への推進がなされておらず、来年度は計画的に実施できるようにしていく。	A	読書冊数が多いのはすばらしいと思う。 ボランティア活動は大切である。さらに多くの生徒が参加できて良かった。	読書科については、今年度の取り組みを継続させ、成果物の内容がさらに向上するようにする。 引き続き読書をすすめて、さらに多くの本に親しむ児童を増やす。
	外国語教育の推進	・授業力の向上とALTの効果的な活用	・小中学校教員の授業交流 ・授業でのALTによる正しい発音の提示 ・休み時間のALTとの交流	・中学校教諭とともに作成した指導案による授業を実施年2回以上実施する。 ・中学校教員の乗り入れ授業を6年生で各クラス2回ずつ行う。	A	A	○中学校教諭と連携した授業を年間2回実施することができた。授業者も参観した教員も、今後の授業作りにおける参考にすることができた。 ○担任が学習の進め方を理解していくことでスムーズな展開の授業が多くなった。担任が「classroom English」を使うことで、児童も英語で相手に伝えようと努めることができた。	A	小中連携の特色を生かしていると感じる。 中学校の先生とすぐに連携でき、すぐに指導を生かせるところが良い。 お互いの相乗効果が望める。	今年度と同様、中学校教諭と連携した授業を実施する。そこで交わした指導方法や情報を皆で共有する機会や方法を設定する。異動してきた教員に確実に周知し連携を促す。
特別支援教育の充実	特別支援教育の推進	・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた個に応じた指導の充実 ・エンカレッジルームの活用促進 ・副籍交流及び共同学習の充実	・巡回指導員による研修会を1学期の早い段階で実施し、個に応じた指導の共通理解を図る。 ・校内委員会の内容を全教職員で共有し、支援の方向性を理解して実践する。 ・特別支援専門員、心理士、スクールカウンセラーとの連携を通して児童に対応できるようにする。	・保護者による学校評価での肯定的評価を9割以上とする。 ・巡回指導教員との情報共有を毎回行う。	A	B	○教職員の中で、個に応じた指導への理解が深まった。特別支援に関わる児童でなくても、丁寧に対応しようとする意識が高まった。 ○巡回指導教員と担任とが情報共有することで、担任は普通の教室での生活や学習に活かせる方法を身に付けることができた。 ●副籍交流をさらに充実させる。	A	学校の取り組みを積極的に保護者に公開していくとの考えに対して、大いに期待している。せつかく十分に準備をして取り組んだにも関わらず、保護者に伝わってなかったがためにアンケートの結果「わからない」という数字となり、成果を下げるのは残念である。	教育相談について、様々な相談機関、SC、エンカレッジルーム、SSW等があることを、HPや学校だよりで発信し、活用を促進させる。 教育相談に対する教員のスキルを高める。不登校生徒の数を現状より減らす。
	子供たちの健全育成	・子供たちの健全育成に向けた取組	・情報共有を密に行い、いじめについては組織的に対応していく。 ・不登校児童分析シートを活用して、不登校傾向の分析を行う。 ・週に1回の生活指導夕会で教員間の情報共有を行う。 ・年3回の生活指導全体会の実施。	・いじめや不登校の早期発見、早期解決。 ・年度末にいじめや、不登校の未解決を0にすること。 ・不登校児童分析シートの継続的な作成。	A	A	○一年を通して大きないじめに関わる問題がなかった。教員間の情報共有や教員が高いアンテナを張って児童の様子を見ていたことが主な要因である。 ●不登校児童が0にならなかった。どのような手立てがあるのかを考えていくとともに、学校全体の重要課題として対策を講じていく。	A	いじめがないことは良いと感じる。 家庭からの協力が少ない中で不登校教0は現実難しいと感じる。引き続き、専門機関との連携を生かし不登校出現が改善傾向に向かわせている点は良いと思う。	不登校対応のため、専門家の研修の機会を設ける。 SSWとのより密な情報交換で今年度以上の協力体制を構築する。
学校と家庭、地域、関係機関との連携強化	学校関係者評価の充実	・教育活動の改善や充実に向けた学校関係者評価の実施、改善	・学校評議員会や民生児童委員との連絡会議で、学校関係者評価を実施し、進捗状況や内容の見直しを図っていく。	・学校関係者評価の内容に関して、肯定的な意見が年度末に80%以上となるようにする。	A	A	○学校評議員や民生児童委員との情報交換の中で学校に対しての要望や改善点を把握することができた。 ●学校評議員の評価を受けて、次年度における取組や改善点を整理し、実践していく。	A	学校評議員会との毎回の話し合いは密で、学校との意見交換は充実したものであった。 来年度も可能な限り学校に足を運び、意見交換を行いたい。	今年度の取り組みを継続させる。 学校評議員の方の意見に耳を傾け、さらに情報を収集していく。
	家庭や地域との連携	・家庭や地域、学校との連携を図る。	・年4回の土曜授業公開や運動会、展覧会において保護者から感想や意見を募り、改善を図る一助とする。 ・学級での様子を学級便りや保護者会を通して保護者に伝える。	・年度末の学校評価アンケートにおいて、「本校に通わせて良かった」という質問項目に対して、80%以上の肯定的意見を目指す。	A	A	○年度末の学校評価アンケートにおいて、「本校に通わせて良かった」という質問項目に対して、約90%以上の保護者が肯定的な意見であった。 ○学校での児童の様子を各お便りで保護者に伝えることができた。	A	学校での防災訓練はとても良いと思う。特に中学生が小学生に防災設備を教えるスタイルは続けてほしい。今年度は、長島町会の防災訓練も実施でき、葛西小学校葛西中学校と連携ができたことがとても良かった。今後は保護者も巻き込み発展させたい。	葛西小中の設備を活用した防災訓練は、今後も継続し発展させる。中学生のボランティアを集い、小学生に教えていくスタイルで、今年度とは違う備蓄倉庫にあるものや防災設備を駆使し扱いに慣れる。
特色ある教育の展開	「学校における働き改革プラン」	・「学校における働き方改革プラン」に基づく取組の実施	・スクールサポートスタッフの有効活用を行う。 ・副校長補佐を導入し、副校長の働き方改革を推進する。	・教員、副校長の10月以降の勤務時間が月10時間以上の軽減を図る。	A	B	○退職時間を気持ち早くするなど、教員の中で働き改革への意識が高まっている。 ●副校長補佐の導入によって副校長の校務に関する負担は減っている。しかし勤務時間の軽減には至っていないので、さらに仕事内容を見直し、副校長と副校長補佐の勤務をはっきりと分けていく。	B	副校長補佐、SSSなど様々な職種が現場に入り働き方改革が少しずつ進んでいると感じる。 教職員の勤務時間が減少し、負担が減ることを望む。	副校長補佐やSSSの仕事の割り振り、分担を明確にし、教職員が依頼できることをわかりやすく示す。 時間外勤務時間を確実に減らす。
	小中連携教育の更なる推進	「小中を通じたカリキュラム・マネジメント」による学力の向上及び「各教科等の連携教育プログラム」による連携の充実	・校内研究や研修を核として、算数や数学の系統性を確立する。 ・外国語活動、外国語科の授業づくりを中学校教諭と行う。	・小中学校の算数や数学の授業参観を学期1回以上行う。 ・小中相互授業参観を毎月1回実施する。	A	B	○小中相互の授業参観を通して、授業の様子を理解するだけでなく、中学校に向けてどのようなことを児童に身に付けさせるべきか具体的に理解することができた。 ●さらに授業だけではなく小中の連携の仕方を検討していく。	A	小学生中学生がお互いに良い影響を与えている。引き続き交流を盛んに生活してもらいたい。	英語・数学のみならず社会などでも小中の授業連携ができないかを考えていく。 感染症にとらわれない学校生活が実現できた時にはさらに交流を盛んにする。
	国際理解教育の推進	日本語学級と連携した、国際理解の醸成とグローバルな視野をもつ児童の育成	・教員による、日本語学級での授業理解。 ・国際理解教室における児童の相互理解。	・全教員日本語学級の参観 ・4年生との国際理解教室実施	A	A	○国際理解教室を通して、4年生児童は他国の文化を理解することができた。 ○日本語学級担当教員が講師となり、日本語学級についての研修を校内教員向けに行ったことで、教員の日本語学級に対する理解が深まった。	A	国際理解教室では、通室している児童・4年生とも充実した時間で良かった。 日本語学級を通して国際理解がさらに進むと良い。	日本語学級の教員の指導方法を学ぶ研修などを設定していきたい。